

た、私の心が間に合わなかったただけだと後で知らされました。

その後、ある時友人に「お前何のために生きてるんだ」と言われ全く答えられませんでした。その時に姉の言葉が思い出されたのです。

姉は死ぬ時「私がもう少し生きることができたなら仏教を勉強したい、自分の兄弟で仏教を勉強する子ができたら本当に嬉しい」と言ってお息を引き取ったのです。私は姉の動かない足を蹴つていじめていた意地悪な弟だったのです、その言葉が耳に残りました。

姉は生きることが出来たら仏教を勉強したいと言っていた。だから仏教は生きることができてく

れるかもしれないと、その答えを求めて仏教を勉強することにしました。姉の七年の法事に池田勇諦（元同朋大学学長）さんのご縁で同朋大学に学びました。しかし、学んでもよく分からず、行きづまりました。その時、また姉のことが思い出されました。

浄土の意味

姉が十五歳頃、手鏡を持ってきてほしいと言いました。夕食の時、姉はその手鏡で食事をする私たちを見ていました。私は腹が立って「何をやっ

とるんや、あんたが食べるとるものも僕らが食べるとるものも同じや、旨いものを食べとるわけとちが

う」と言っ

て鏡を取り上げたことがありました。後になつて私が思い出すのは、姉は手鏡を通して、他

者ととも

に生きる自分、

豊かな関係で生きる自分、つまり浄土を求めていたのではな

いかと思われ



いた。人間よ、同朋たれ」とは「人間よ、人間たれ」ということです。

社会に関わる仏教

私が姉の死を通して

触れさせてもらった仏教は、個人としての自分を磨くとか成長させるということよりも、同朋として、縁起・無我として、人と共に生きている存在に気づかせてもらうのが仏教ではないかと思えます。その視点で仏教を分けると、「社会に関わる

仏教」と「社会に関わらない仏教」に分けることができると思います。前者は、吉田兼好の『徒然草』に「仏道を願うとは別のことなし。暇ある身になりて世のことに心を

かけぬを第一の道とす。」とあるように、津波でたくさんの方が亡くなる

とも、原発事故で多くの方が古郷を追われて被曝しようとも、そのことには気にかげず、心を安定させて智慧を開発するの

が仏教だという理解。多くの人はこう理解しているのではないのでしょうか。そういう誤った考えに支配されている人は、宗教者が社会のことに関わる

と、それは宗教者の関わることでないと揶揄します。

私は、浄土真宗は人と人が豊かに生き合う宗教、当然社会に関わる仏教だと思っています。親鸞聖人は「世のいのりに心いれてもうしあわせたまふべし」とおっしゃっ

れるのです。浄土とは、架空の存在ではなく、私

たちが生き、また死んでゆくのに不可欠な世界で

す。人として本当に生きる

ことの意味、人間である

に人間を取り戻させる世界、この浄土を明らかに

して下さる仏法が浄土真宗です。浄土からのメッ

セージを通して、自己を見失い、世界を見失って

いる自分を見いださせて